「明海日本語」第七号（二〇〇二・三）

研究ノート

今昔物語集の「べし」の表記について

谷光忠彦

延慶本平家物語にみる助動詞「ベキ」の表記で

○サテハ誰ニテカ有ベキ（第一本）

のような仮名表記の仕方はは和文、和漢混淆文を問わず一般的であるが

○来十三日ノ午時以前に彼の御堂に可参（第一本）

○彼ノ以テ白山平泉寺ヲ可キ為延暦寺之末寺之由可シ被ル宣下（第一本）

のように「べし」を「可」と表記し、その一字で「べし」と訓む場合と「可シ」「可キ」のように「可」に片仮名の送り仮名を付して表記する場合とがある。

このような表記は点本にみる表記の特色であることが、既に大坪併治氏のご指摘がある。（『訓点語の研究』・風間書房・四四一頁）「可」に「ベシ」の訓を振ることは漢文の訓読からきたことであるから、和漢混淆文にかかる表記が多いのは当然のことであるが、「可」に送り仮名を送るか、送らないかについては、些か歴史的経緯が感じられるので、次にその事について鄙見を述べてみたい。

「表Ⅰ・Ⅱ」は、今昔物語集に用いられたられた「可」「―可□シ」「―不可□ズ」「―ベシ」の用例数である。

少し具体例を挙げておこう。

座ト可為ト　（巻一・六）

可奉仕也　（巻三・二四）

暫クモ可有様无ケレドモ　（巻四・三八）

速ニ可教ト　（巻五・十）

慈悲可有キ者ニモ非ズ　（巻十九・四四）

只思ヒ可遣ベシ　（巻十九・五）

此人得度スベシト見て　（巻二・三二）

不可隠給ズと　（巻十・三二）

其ノ法師更ニ不可召ズ　（巻十二・三六）

「表Ⅰ」「表Ⅱ」で、訓読調の文体の特徴を強く有する天竺・震旦部に「不可ズ」の表現が多いのは当然の現象であって、それを除けば天竺・震旦部は１０９２例、本朝部前半は１０６３例、本朝部後半は１０２４例で、その頻度数の差で論ずべき特色はない。

ところが個別にみると注意すべき違いがみられる。例えば「―可□キ―」と「―可―」の表記の現れる度合には些かの違いがみられる。つまり、「―可□キ―」表記は本朝部後半において減少し「―可―」表記は逆に増えている。

表Ⅰ

巻	可□シ		計	可		計
	地	会		地	会	
1	9	84	93	1	12	13
2	27	87	114		14	14
3	8	53	61		3	3
4	15	86	101	2	8	10
5	56	102	158		4	4
6	12	72	84		1	1
7	5	65	70	1		1
9	22	72	94	2		2
10	37	121	158	4		4
小計	191	742	933	10	42	52
11	30	95	125	3	6	9
12	34	67	101			0
13	18	64	82		4	4
14	21	80	101			0
15	24	56	80		1	1
16	59	83	142	1	2	3
17	23	57	80		2	2
19	54	70	124	1	1	2
20	55	72	127	6	16	22
小計	318	644	962	11	32	43
22	10	12	22		1	1
23	15	16	31	1	2	3
24	41	69	110	4	7	11
25	32	52	84	3	8	11
26	33	19	52	38	44	82
27	40	43	83			0
28	41	89	130	1	1	2
29	79	74	153			0
30	36	22	58			0
31	30	49	109		1	1
小計	387	445	832	47	64	111
合計	896	1831	2727	68	138	206
	2727			206		

表Ⅱ

巻	仮名表記 ベシ		計	不可□ズ		計
	地	会		地	会	
1	7	33	40	1	16	17
2	4	15	19	3	12	15
3	2	11	13	5	13	18
4	1	6	7	4	16	20
5		14	14	2	24	26
6		1	1		8	8
7		2	2	3	20	23
9	3	3	6	3	15	18
10	2	3	5	4	22	26
小計	19	88	107	25	146	171
11	1	1	2	2	6	8
12	2	1	3	3	16	19
13	1		1	4	8	11
14	3	2	5	4	9	12
15	4	4	8		11	11
16	8	2	10	1	6	7
17	1	5	6	2	9	11
19	8	7	15	1	6	7
20	4	4	8	13	8	21
小計	32	26	58	28	79	107
22	1	1	2		1	1
23	3	4	7	1	1	2
24	5	9	14	4	4	8
25	7	7	14		7	7
26	11	10	21		3	3
27	6	2	8	4	1	5
28	2	5	7	2	3	5
29	1		1	2	3	5
30				2	3	5
31	2	5	7	2	5	7
小計	38	43	81	17	31	48
合計	89	157	246	70	256	326
	246			326		

元来送り仮名は、読むための補助的なものであるから「― 可―」を「―べし」と読む習慣ができてしまえば、わざわざ「可」に送り仮名をつける必要はない。今昔物語集の文体の特色からして、本朝部後半に、「可」に送り仮名をつけない表記法が増大することは今昔物語集の文体の特色からして十分に頷ける。

大体に訓読調の濃い文体には、このような表記がみられる。

只ニ返ス不可ス（古鈔本打聞集）

不安事ニ思テ世ノ謗ト愁アヘル也。（古鈔本打聞集）

心ヲナヤマス事はアケテ不可計（大福光寺本方丈記）

可然ト思食テ（慶長八年古活字本太平記）

只東夷ヲ可亡企ノ外ハ他事ナシ（慶長八年古活字本太平記）

可然と同心スルホドニ（寛永版中華若木詩抄）

不可然ト云也（寛永版中華若木詩抄）

可伐ト云ソ（寛永版中華若木詩抄）

しかし、同じ一つの文章の中でも大部分の「べし」の表記はかな書きとなっていることが多いのであるから、わざわざ「可」を表記することは気まぐれとしか思えない点もある。

もし気まぐれ表記が社会通念として存在するならばいろいろな作品にみられるのではないかと思い、念のため平中物語・篁物語・栄花物語・百座法談聞書抄・人天眼目抄・宇治拾遺物語・神皇正統記・増鏡・保元物語・義経記・活語指南等も垣間見たが、かかる表記はみられなかった。とすると、このような表記は文体上の特色によるとみなければなるまい。したがって今昔物語集の表記は、やはり特殊で、そこには多くの文体史的実態が表れているとみなければならない。

そうみてくると、表Ⅰ・表Ⅱにみるような地の文と会話の文との比較においても様々な特色が想起できる。「―可□シ」、「可」、「ベシ」の何れの表記についても会話に多く、地に少ないという傾向がある。特に天竺震旦部にその傾向が強い。それは何を意味するものであろうか。一つは原典の多くが漢文であることに因るものであることが考えられる。もう一つは今昔物語集の特色からみて、本朝部にで和文本来の表現を取り戻したか、あるいは改変したかと考えることはできないだろうか。そのことは「可」に対して送り仮名をつけなくても「べし」と訓むことに慣れてきたことと傾向が一致する。

後に「可」に送り仮名を用いなくなることは、先に挙げた打聞集・方丈記・中華若木詩抄の例からしてもわかる。「可」の用法については今後更に深い調査が必要であろう。